

「済州4・3事件に学ぶ」—京都から「4・3事件」を考える—

今年で70年を迎える「済州4・3事件」について、京都の地からパネル展やビデオとお話、パネルディスカッションを通じ学び、考えます。

日時：2019年1月7日（月）午前9時～19日（土）午後5時
*ビデオとお話、パネルディスカッションは14日（月）のみ。

会場：京都市地域・多文化交流ネットワークサロン
京都市南区東九条東岩本町31



カン・ヨベ作「漢拏山に入った人々」



カン・ヨベ作「おっばい」

*ビデオとお話、パネルディスカッション

1月14日（月）

午後2時～3時 ビデオ上映

「悲劇の島 チェジュ（済州）～『4・3事件』在日コリアンの記憶～」
（2008年4月27日放映 NHK「ETV特集」）

お話：伊地知紀子さん（大阪市立大学文学研究科教授）
「済州4・3事件とは」

午後3時 コーヒーブレイク

午後3時15分～5時 パネルディスカッション

「京都から『済州4・3事件』を考える」

パネリスト：呉光現（オ・クアンヒョン）さん（在日本済州4・3犠牲者遺族会会長）

：中村一成（ナカムライルソン）さん（ジャーナリスト）

進行：西岡研介さん（ノンフィクションライター）

午後5時45分～ 交流会 「ハルバン」（京都市南区東九条南河原町6-10）

主催：「済州4・3企画」実行委員会

協賛：特定非営利活動法人 コリアNGOセンター／京都市地域・多文化交流ネットワークサロン／京都・東九条CANフォーラム／アジア国際夏期学校／愛隣館研修センター／立命館大学コリア研究センター／特定非営利活動法人 丹波マンガ記念館／特定非営利活動法人 聖公会生野センター／在日本済州4・3犠牲者遺族会

「済州4・3事件に学ぶ」——京都から「4・3事件」を考える——への呼びかけ

「日本から済州島まで来てくれてありがとう。『4・3』の歴史を学びに来てくれて感謝しています……」

2017年4月1日から3日にかけて、済州島で行われた「済州4・3慰霊の旅」の現地コーディネーターを務めて下さった金昌厚(キム・チャンフー)氏(前「四・三研究所」所長)は参加者との別れ際、こんな挨拶をされた。

10回を数えたこの「慰霊の旅」を企画し、旅の間、通訳を務めてくれた呉光現(オ・クァンヒョン)氏(「在日本済州4・3犠牲者遺族会」会長)を通じて聞いたこの金氏の言葉に、私は恐縮すると同時に、この旅で知った過去の事実と、今なお続く重い現実は今後、どう向き合っていけばいいのかを思案し続けていた。

済州4・3事件は、第二次世界大戦後の米軍政期に起こり、朝鮮戦争勃発後に至るまでの7年7カ月にわたって、済州島全域で行われた住民大量虐殺事件だ。

発端は1947年3月1日、米軍政の済州島民に対する圧政に抗して行われた官・民一体のゼネストだった。デモ隊に向かって警察が発砲し、住民6人が死亡。島民の怒りはピークに達した。これに対し米軍政と警察は済州島を「アカの島」とフレームアップし、本土から応援の警察部隊と極右勢力の「西北青年団員」を送り込み、徹底した弾圧を行った。

この米軍政や警察による弾圧、また朝鮮半島の分断を固定化させる南半島の単独選挙に抗し、翌48年4月3日、共産主義政党である南朝鮮労働党(南労党)済州島党が武装蜂起した。これを以て後に「4・3事件」と呼ばれることになるのだが、同年8月15日、南半島単独選挙によって大韓民国政府が樹立されると、李承晩政権は済州島を「鎮圧」するために軍隊を派遣。11月17日には戒厳令が敷かれ、済州島全域で「焦土化作戦」が展開された。多くの無辜の島民が「アカ」の烙印を押され、「武装隊に協力した」という理由で、集団で虐殺されたのだ。

さらに50年、朝鮮戦争が勃発すると、済州島民らに対し「予備拘束」が行われ、再び多くの住民が「処刑」された。そして54年9月21日の「漢拏山(ハルラサン)禁足地域の全面解放」を以て、4・3事件は終結した——とされるのだが、この間の犠牲者は2万5千〜3万人に及んだといわれている。

済州島でこのような事件があったことは、盧武鉉(ノ・ムヒョン)元大統領が、韓国大統領として初めて済州島民に公式謝罪した2003年以降、日本の新聞、雑誌等でも時折、報じられるようになったので、全く知らないわけではなかった。さらに言えば、学生時代からの友人でもある呉氏が20年前からこの事件に取り組んでいたことも知っていた。が、私の中では、あくまで「韓国近代史上、隠蔽されてきた惨事」という認識だった。

2017年3月、抱えていた仕事が一段落し、長年、気になっていた隣国の史実でもあったので、私は冒頭の「済州4・3慰霊の旅」に参加した。

500人以上の住民が虐殺されたノブンスンイ、ムドンイワツヤクンノルケなどの「失われた村」、そして朝鮮戦争勃発後、予備拘束された200人近くの人々が集団虐殺されたアルトゥル飛行場跡……。半世紀にわたって「語ることも、悲しむことさえ、許されなかった」それらの現場から、70年の歳月とタブーを乗り越えてくる事実のあまりの凄惨さに私は、圧倒され、言葉を失い、混乱した。僅か3日間、「4・3事件」のほんの「入り口」に立っただけにもかかわらず、だ。

そして整理のつかない頭と心を抱えながら帰国した私は、折に触れ、それを試みようとしたが、うまくいかないまま、1年が過ぎ、事件から70年を迎えた。

日本人である私にとって最大の課題は、この事件に対し「当事者性」が持てないことだった。

日本による朝鮮に対する過去の植民地支配、それに起因する強制連行や慰安婦問題などの歴史的事実、さらには日本社会に蔓延する在日朝鮮人差別や、それが顕在化したヘイトスピーチなどの問題は全て「日本人の問題」であり、これらに対しては当事者意識を強く持てる。

一方、「済州4・3事件」では、弾圧を指示した当時の警察幹部の多くが「日帝時代の官吏」であり、焦土化作戦を行った軍幹部の大半が「旧日本軍の志願兵」だったことなど、事件の背景には間違いなく「日本の植民地支配」が存在し、それが大きく影響している——ということは、頭では理解できるのだ。が、なかなか「当事者」としての感覚が持てず、正直、この事件にどう向き合えばいいのか苦慮していた。

そんな悶々とした気持ちを抱えながら私は、今年4月22日に大阪・東成区民センターで開かれた「済州4・3事件70周年犠牲者慰霊祭」に参加した。開会の30分以上前に到着したにもかかわらず、会場となったホールは満席。通路にも人が溢れ、開会時間になってもまだ、入り口の前には入りきれない人の列ができていた。後に聞いたところによると大阪では700人、東京では1500人が参加したという。その多くが遺族の一世や、その子や孫の二世、三世だった。

「4・3事件当時、虐殺から逃れるために日本に渡った済州島民は『5千人以上』とも、『1万人以上』とも言われるが、在日社会では未だに事件そのものがタブーとなっているため、正確な数は分からない……」

以前、呉氏からこんな話も聞かされていたし、金石範(キム・ソクポム)さんや金時鐘(キム・シジョン)さんの作品や、文京洙(ムン・ギョンス)教授の論文からもそうした事実を知り得ることはできた。だが、あの日、東成区民センターに集まった多くの人の姿を目の当たりにして初めて、日本が済州4・3事件の「現場」の一つであることを強く認識すると同時に、ようやく「関係者性」を見出すことができた。

このような経緯から私は、20年余にわたってこの事件に取り組んできた呉氏ら在日の遺族や、大阪や神戸と同様に済州島出身者が暮らす京都の人たちと共に、この「済州4・3事件に学ぶ」に企画段階から関わり、呼びかけ人の一人に名を連ねることにしました。

日本人、朝鮮人という民族の違い、「韓国」、「朝鮮」という国籍の別を問わず、一人でも多くの人に犠牲者の「声なき声」に耳をすませていただければ幸いです。